

いぼ

新美南吉

青空文庫

にいさんの松吉まつきちと、弟の杉作すぎさくと、年もひとつちがいでしたが、たいへんよくにっていました。おでこの頭が顔のわりに大きく、わらうと、ひたいにさるのようにしわがよるところ、走るとき、両方の手をひらいてしまふところも同じでした。

「ふたり、ちつとも、ちがわないね。」

と、よく人がいました。そうすると、にいさんの松吉が、口をとがらして、虫くい歯のかけたところからつばをふきとばしながら、いうのでした。

「ちがうよ。おれにはふたつもいぼがあるぞ。杉にやひとつもなしだ。」

そういつて、右手の骨ほねばったにぎりこぶしを出して見せました。見ると、なるほど、親指と人さし指のさかいのところに、一センチぐらいはなれて、小さいいぼがふたつありました。

この兄弟の家へ、町から、いとこの克巳かつみが遊びにきたのは、きよ年の夏休みのことでした。克巳は、松吉と同一年の、小学校五年生でした。

克巳は五年生でも、からだは小さく、四年生の杉作とならんでも、まだ五センチぐらい低かったが、こせこせとよく動きまわる子で、松吉、杉作の家へくるとじき、はつかねずみというあだ名

をつけられてしまいました。

松吉、杉作の家のうらてには、ふたかかえもあるニツケイの大木がありました。その木の皮を石でたたきつぶすと、いいにおいがしたので、おとなたちが、昼ねをしている昼さがりなど、三人で、まるできつつきのように、木のみきをコツコツとたたいていたりしました。

また、あるときは、おじいさんの耳の中に、毛がはえていることを克巳が見つけて、

「わはア、おじいさんの耳、毛がはえている。」

とはやしたてたことがあります。松吉、杉作は、もうずっとまえから、そんなことは知っていました。が、あまり、克巳がお

もしらそうにはやしたてるので、いつしよになってこれも、

「わはい、おじいさんの耳、毛がはえている。」

と、はやしたてたものでした。すると、おじいさんが、松吉、杉作をにらみつけて、

「なんだ、きさまたちや。おじいさんの耳に、毛のはえとることくれえ、毎日見て、よく知ってけつかるくせに。」

と、しかりとばしました。そんなこともありました。

克巳はからうすをめずらしがって、米をつかせてくれとせがみました。しかし、二十ばかり足をふむと、もういやになって、おりてしまいましたので、あとは、松吉と杉作がしなければなりません。

あしたは克巳が、町へ帰るといふ日の昼さがりには、三人でたらいをかついで裏山うらの絹池きぬいけにいきました。絹池は、大きいといふほどの池ではありませんが、底知れず深いのと、水がすんでいてつめたいのと、村から遠いのとで、村の子どもたちも、遊びにいかない池でした。三人は、その池をたらいにすがって、南から北に横ぎろうといふのでした。

三人は南の堤防ていぼうにたどりついてみますと、東、北、西の三方を山でかこまれた池は、それらの山と、まっ白な雲をうかべているばかりで、あたりには、人のけはいがまるでありません。三人はもう、すこしぶきみに感じました。しかし、せつかくここまでたらいをかついできて、水にはいりもせず帰っては、あまり、い

くじのない話ではありませんか。三人は勇氣ゆうきを出して、はだかになりました。そして、土手どての下のよしの中へ、おそるおそる、たらいをおろしてやりました。

たらいが、バチャンといいました。その音が、あたりの山一面に聞こえたらうと思われるほど、大きな音に聞こえました。たらいのところから、波の輪がひろがっていきました。見ていると、池のいちばんむこうのはしまでひろがっていつて、その小松のかげが、ゆらりゆらりとゆれました。三人はすこし、元氣が出てきました。

「はいるぞ。」

と、松吉が、うしろを見ていいました。

「うん。」

と、克巳かつみがうなずきました。

三人のはだかん坊ぼうは、ずぼりずぼりと水の中にすべりこみ、たらいのふちにつかまりました。そして、うふふふ、と、おたがいに顔を見合わせてわらいました。おかしいのでわらったのか、あまりつめたかったのでわらったのか、じぶんたちにもよくわかりませんでした。

もう、こうなつては、じつとしているわけには、いきません。

三人は足を動かしました。はじめのうちは、調子ちようしがそろわないので、ひとつとところであばれているばかりでした。が、そのうちに、三人は同じ方へ水をけりました。たらいは、すこしずつ、池

の中心にむかつて、進みはじめました。

長い時間がたちました。

三人はへとへとになりました。もう足を動かすのがいやになりました。さて、三人は、どこまでできたのでしょうか。じぶんたちの位置いちを見て、三人はびつくりしました。いまちようど、池のまん中ちゆうちゆうにいるではありませんか。

まわりの山で、せみは鳴きたてています。気ばかりあせります。しかし、からだはもう動きません。

「もう、おれ、およげん。」

と弟の杉作が、なきだすまえのわらい顔でいいました。

松吉も、なきたい気持ちでした。だまって目をつむりました。

「ぼくも、もう、だめや。」

と、克巳かつみもいいました。

松吉は目をひらくと、きつぱり、

「もどろう、そろそろいこう。」

と、いいました。

そして、たらいを、ぎやくの方向に、ぐいとひとつおしました。杉作も克巳も、だまっています。しかし、松吉についていくより、しかたがありませんでした。つかれきつたふたりの顔に、かすかにわきあがる力のいろが見えました。

たらいは、動いていくようには思えませんでした。いつまでたつても、もとの土手どてに帰りつくことは、できないように見えまし

た。

三人は、ときどき、ちつとも近くなならない土手の方に、ちらつちらつと、絶望ぜつぼうしたような目をなげました。

そのとき、松吉の口をついて、

「よいとまアけ。」

という、かけ声がとび出しました。

よいとまけ——それは、いなかの人たちが、家をたてるまえ、地がためをするとき、重い大きいつちを、上げおろしするのに力をあわせるため、声をあわせてとなえる音頭おんどです。それはいなかのことばです。町の子どもである克巳かつみに聞かれるのは、はずかしいことばです。しかし、いまは、松吉は、はずかしくもなんともし

ありません。必死ひっしでした。

「よいとまアけ。」

と、水をけつて、また松吉はいいました。

すると、弟の杉作がなき声で、

「よいとまアけ。」

と、応おうじました。杉作も必死ひっしでした。

「よいとまアけ。」

松吉は、声をはりあげました。

するとこんどは、杉作ばかりでなく、克巳かつみまでがいつしよに、

「よいとまアけ。」

と、応じました。

克巳もまた、必死だったのです。

三人とも必死でした。必死である人間の気持ちほど、しつくり結びあうものはありません。

松吉は、じぶんたち三人の気持ち、ひとつのこぶしの形に、しつかり、にぎりかためられたように感じました。そうすると、いままでの百倍もの力が、ぐんぐんわいてきました。

「よいとまアけ。」

と、松吉。

「よいとまアけ。」

と、杉作と克巳。

きゆうに、たらいが、速くなったように思われました。もう土^ど

手は、すぐそこでした。そら、もう、よしの一本が、たらいにさわりました。

克巳は、いなかの松吉、杉作の家に十日ばかりいたのですが、最後のこの日ほど、三人がこころの中で、なかよしになったことはありませんでした。

池から家へ帰つてくると、三人はこころもからだも、くたくたにつかれてしまったので、ふじだなの下の縁台えんだいに、おなかをぺこんとへこませて、腰こしかけていました。

そのとき克巳かつみは、松吉の右手をなでていましたが、

「いぼつて、どうするとできる？ ぼくもほしいな。」
と、わらいながらいいました。

「ひとつ、あげよか。」

と、松吉はいいました。

「くれる？」

と、克巳はびっくりして、目を大きくしました。

松吉は、家の中から、箸はしを一本持つてきました。

「どこへほしい。」

「ここや。」

克巳は信じないもののように、クツクツわらいながら、左の二の腕うでを、うえぼうそうしてもらうときのように出しました。

松吉の右手の一つのいぼと、克巳の腕とに、箸がわたされま
した。

松吉は、大まじめな顔をしました。そして、天のほうを見ながら、

「いぼ、いぼ、わたれ。

いぼ、いぼ、わたれ。」

と、よく意味のわかるじゆもんとなえました。

そのよく日、町の子の克巳かつみは、なすや、きゆうりや、すいかを、どっさりおみやげにもらって、町の家に戻っていったのでした。

二

牛部屋べやのかげで、さざんかが白くさくころに、松吉、杉作のう

ちでは、あんころ餅もちをつくりました。農揚のうあげといつて、この秋のとり入れと、お米ごしらえがすっかり終わつたお祝いに、どこのひやくしようや百姓家でもそうするのです。

松吉と杉作が、土曜の午後に、学校から帰つてくると、そのお餅を、町の克巳の家にくぼつていくことになりました。これはもうきのう、お餅をつくつておるときから、ふたりがおかあさんにたのんで、かたく約束しておいたことです。

なぜなら、このことには、ふたつのよいことがありました。ひとつは、夏休みになかよしになつたといふこの克巳に会えるということ、もうひとつは、あまりはつきりいたくないのですが、おだちんをもらえることです。そしてまた、町のおじさんおばさん

は、いなかの人のように、お銭かねのことではケチケチしません。いつも五十銭ぐらい、おだちんをくれたのです。

おかあさんが、お餅のはいった重箱じゅうぼこを、風呂敷ふろしきにつつんでいるとき、松吉は、

「ねえ、おつかさん、電車に乗ってつても、ええかん。」
と鼻にかかる声で、ねだりました。

「なんや？ 電車や？ あんな近いとこまで、歩いていけんようなもんなら、もうたのまんで、やめておいてくよや。おとつあんに自転車じてんしゃでひと走りはしりいつてきてもらや、すむことだで。」

「うふん。」

と、松吉は鼻をならしました。しかし、帰りはもらったおだち

んで、電車に乗ることができると思つて、わずかに心をなくさめました。

松吉と杉作は、ぼうしをかむらないで家を出ました。ぼうしをかむつて町へいくと、町の子どもが徽章きしやうを見て、松吉、杉作がいなかからきたことを、さとるにちがいありません。それが、ふたりはいやだったのです。

ふたりが八幡はちまんさまの石鳥居の前を通りかかると、そこで、こまを持って、ひとりでしよぼんとしていたけん坊けんぼうが、

「杉、どこへいくで、遊ぼかよ。」
と、声をかけました。

杉作は、

「おれたち、町へいくんだもん。」

と、いいました。そしてふたりは、新しい幸福にむかつて進んでいく人のように、わき目もふらないで過ぎていきました。

けん坊ぼうは、はねとばされた子ねこのような顔をして、ふたりを見送っていました。

村を出てしまつたところに、松吉は、じぶんの右手がいたんでい
ることに、気がつきました。見ると、重じゅうばこ箱ばこが右手に持たれて
いたのでした。

ちようど、うまいぐあいには、一メートルぐらいの竹切れが、道
ばたに落ちていました。ふたりはその竹を、風呂敷ふろしきの結びめの下
に通して、ふたりでさげていくことにしました。弟の杉作が先に

なり、兄の松吉があとになりました。こうしてふたりで持てば、
重箱じゅうばこはたいそう軽いのでした。うまいぐあいでした。

ふたりはしばらく、だまっていききました。松吉はぼんやりと、
考えはじめました——五十銭くれると。五十銭もくれるだろうか。
でもおばさんは、きよ年もそのまえも五十銭くれたから、ことし
だつて、くれるだろう。五十銭くれると、それでなにを買おうか。
模型飛行機もけいの材料——あの米屋の東一君が持っているようなのは、
いくらするだろう。五十銭では買えないかなア。それとも、雑誌ざっし
を買おうかなア。弟は、なにがいいというかしらん……。。

松吉の、とりとめのない夢ゆめは、とつぜん、

「どかアん！」

という、とてつもない音で、ぶちやぶられました。松吉はきもをつぶして、あやうく、持っていた竹を、はなしてしまふところでした。

そんな声をだしたのは、すぐ前を歩いている弟の杉作でした。杉作であることがわかると、松吉ははらがたつてきました。

「なんだア、あんなばかみてな声をだして。」

すると杉作は、うしろも見ないで、こういうのでした。

「あつこの木のとつぺんに、とんびがとまったもんだん、大砲たいほうを一発うっただけや。」

それでは、しかたがありません。

また、しばらくふたりはだまっていきました。

また松吉は、考えはじめました——克巳かつみはきよう、うちにいる
だろうか。おれたちの顔を見たら、どんなに喜ぶだろう。いぼは
うまく、腕うでについたろうか。おれのいぼは、ひとつ消えてしまっ
たけど。

松吉は、じぶんの右手をそつと見ました。

三

町にはいると、ふたりは、じぶんたちが、きゆうにみすぼらし
くなつてしまったように思えました。

これでは、ぼうしの徽章きしやうを見なくても、
山家やまがから出てきたこ

とがわかるでしょう。第一、町の人は、こんなふうたましいに、魂たましいをぬか
れたように、きよろんきよろんとあたりを見ていたり、荷馬車に
ぶつかりそうになって、どなりつけられたりはしません。ところ
が、このきよろんきよろんがふたりともやめられないのでした。

ふたりは、こころの中では、ひとつの不安を感じていました。

それは、町の子どもにつかまって、いじめられやしないか、とい
うことでした。だから、ふたりはこころをはりつめ、びくびくし
なるべく、子どもものいないようなところをえらんでいきました。

同盟書林どうめいしよりんという、大きい本屋の前を通りすぎて、すこしい

つてから、東へはいるせまい路地ろじなかに、克巳くつぎの家はありました。

そこで、同盟書林どうめいしよりんをすぎると、ふたりは、首をがちようのよ

うにのぼして、どんな細い路地ものぞきこみました。道もない、ただ家と家のあいだになつているところまで、のぞきこみました。そのうちに、杉作が、

「あつ、ここだ。」

と、落とした財布でも見つけたように、さげびました。なるほど、その小路のなかほどに、紅と白のねじ飴の形をした、床屋の看板が見えました。——克巳の家は床屋さんでした。

ふたりは、幸運のしつぽを、たしかにつかんだ人のように、あわてずに、進んでいきました。竹切れは、ぬいてすてました。

重箱は松吉が持ちました。松吉は口の中で、むこうでいうように、おかあさんから教えられてきたことを、復習しました。

店の前までくると、入口のすりガラスの大戸の前には、冬の午後の、かじかんだ日ざしをうけて、ひとつひとつの葉の先に、とげのあるらんの小さい鉢はちがふたつおいてありました。らんの根もとには卵たまごのからがふせてあつて、それに道のほこりがつもつて、うそ寒いように見ええました。しかし、店の中は、すりガラスでよくは見えませんが、あたたかそうな湯気ゆげがたっています。そこには、やさしいおばさんおじさん、なつかしい克巳くぢがいるのです。

重いガラス戸をあけて中へはいりますと、おじさんがひとり、たたみのしいてあるところに、あおむけにひっくり返つて、新聞を読んでいました。こちらの方では、まるい銀の頭を、ぴかぴかにみがきあげられたタオルむしが、ひとりで、ジューン、ジュー

ンと湯気をふいていました。

おじさんは新聞を読みながら、うとうととしていたらしく、しばらくそのままでしたが、やがて、人のけはいにおどろいて、ガバツと新聞をはねのけ、起きあがりました。それを見て、ふたりはびつくりしました。おじさんではなかったのです。

それはふたりの村の、かじ屋の三男の小平こへいさんでした。小平さんは、そのまえの年の春ごろ、学校を卒業しました。そういえばいつか小平さんが町の床屋とこやさんへ、小僧こぞうにいったということを、聞いたような気がします。

ふたりは、つくづくと小平さんの顔とすがたを、うちながめましました。

小平さんはなんとなく、おとなくさくなりました。色が白くなり、あごのあたりがこえてきたようでした。頭も床屋とこやにきたからでしょうが、四角なかつこうに、きれいにかりこんでいます。もとから、あまり口をきかないで、目を細くして、にこにこしていました。そのくせ、人のうしろから、よくいたずらをしました。

いちど、松吉は、耳の中へあずきを入れられて、こまったことがありました。ああいうことを、小平さんは、今でもおぼえてるかしらん、忘れてしまったかしらん——ともかく、いまも小平さんは、白いうわっぱりのポケットに両手を入れて、ふたりを見ながら、にこにこしています。

小平さんは、きょうは親おやかた方もおかみさんも、こんこうきよう金光教のな

んとやらへいつていない、克巳かつみちゃんもまだ学校から帰ってこない、といいました。

ふたりは、ちよつと失望しつぼうしました。

「だが、まだ三時だから、もうちよつと待つておれよ。そのうちに、おかみさんが帰つておいでるかもしれんに。」

と、小平さんがいいました。

そこでまた、希望きぼうがわきました。ふたりは、あがりはなに、目め白しろおしにならんで、腰こしをかけました。

小平さんは、ともかく、お餅もちをいただいておこうといつて、おくへはいつていき、カタンコトンと音をさせていましたが、やがて、からの重箱じゆうばこを、また風呂敷ふろしきにつつんで出てきました。松

吉はそれをうけとつて、ひぎの横におきました。

あれから、五分たちました。まだ、おばさんは帰ってきません。おじさんも克巳かつみも、帰ってきません。松吉、杉作はいつしよに、小さいためいきをつきました。

小平さんは、ふたりの頭を見ていましたが、

「だいぶ、のびとるな、ひとつ、だちんのかわりに、かつてやろか。」

と、いいました。

ふたりは顔を見あわせて、クスリとわらいました。

松吉も杉作も、生まれてからまだ一ども、床屋とこやでかみをかつてもらったことはありませんでした。いつもふたりのかみをかつた

のは、おとうさんか、おかあさんの手にぎられたバリカンでした。そのバリカンは、もう五、六年まえから、ひどく調子ちようしが悪く、ときどき、ぐわツと大きくかみついて、とることもどうすることもできなくなってしまうようなしまつでしたので、ふたりは、家でかみをかることを、あまり好んではいませんでした。

ふたりは、目の前にある、りっぱな腰かけを見ました。白いせとものひじかけがついています。おしりののるところは、黒い皮ではってあります。もたれるところも、黒い皮です。その上に、小さいまくらのようなものまで、ついています。下の方は、足をのせるかねの台があつて、それにはすかしぼりの模様もようがあります。このりっぱな腰こしかけに腰かけて、やってもらおうのです。ふたりは

また、なんとなく顔を見あわせました。

小平さんにうながされて、松吉と杉作は、先をゆずりあって、おたがいすみの方へひっこみあいをしました。とうとう、にいさんの松吉が、先にしてもらうことになりました。

松吉はこわごわ、りっぱな腰かけにのりました。ばかに高いところに、のぼったような気がしました。すぐ前の大きい鏡に、あまりにはつきり、じぶんのひょうたん顔がうつりましたので、はずかしくなりました。

小平さんは、まっ白な布で、松吉の首から下をつつんでしまいました。手も出ませんでした。

小平さんは、どこかからバリカンをとり出してきました。バリ

カン、家と同じもののように見えました。バリカンがさわつたとき、松吉は思わず首をすくめました。このバリカンも、かみつくかと思つたのです。

ポロリと、白い布の上に落ちてきたものを見ると、かられた、黒い、じぶんのかみの毛でした。なアんだ、もうかられているのかと、思いました。ちつとも、いたくないではありませんか。そこで松吉は、やつと安心して、かたの力をぬきました。

かみがかられてしまうと、松吉は、これでおしまいだと思いましたが、家ではいつでも、それだけだったからです。ところが、おどろいたことには、腰かけがキーイとかすかな音をたてて、うしろへたおれていきました。

「あッ。」

と、松吉は、声をたてました。しかし、腰かけはたおれたのではありませんでした。もたれだけが、うしろにのびて、腰かけている人があおむけにねるようになったただけでした。

天じょうの白壁しろかべや、キャベツの玉のような形の大きい、すりガラスの電燈を見ていると、とつぜん、顔一面に、だツとなにかあついぬれたものをのせられて、目も見えなくなってしまいました。見ていた杉作が、おかしかったのか、ハハハハ、とわらっています。松吉もわらいたいのですが、顔がふさがっていて、わらうことができません。人間は、顔でわらうのだということが、よくわかりました。顔にのせられたのは、むしタオルでありました。

小平さんはタオルをのけると、太い筆のようなもので、せっけんのあわを松吉の顔にぬり、かみそりで、ひたいぎわからそりはじめました。

松吉はそのとき、小平さんがまだ子どもで村にいたころ、松吉たちによくいたずらをしたことを、また思い出しました。小平さんはよくうしろから、そつときで、人の背中せなかへ手を入れたり、わきの下をくすぐったりしました。そして、小さい目を細くして、にやにやわらっていました。

いまも松吉は、小平さんが、そんないたずらを、はじめるのではないかと、おしりのおちつかぬ思いでした。ことに小平さんが、松吉の耳をつまんで、二どばかり、耳の毛をそったときには、松

吉は、てつきり、小平さんが、むかしのいたずらをはじめたと、思いました。もうすこしで、クツクツとわらいだすところでした。しかし、小平さんの顔を見ますと、まじめな顔をしていました。あそびをしているのではない、仕事をしているおとなの顔つきでありました。

松吉には、小平さんがおとなになったから、もうあそばないということがわかりました。おとなは仕事をするのです。たとえば、人の耳をつまんでそるといふような、いたずらみたいなことでも、小平さんは仕事ですから、まじめにするのです。松吉には、おとなになるといふのは、ふざけるのをやめて、まじめになる約束のように思われました。なんとなく、さみしい感じがしました。

すみの洗面所^{せんめんじよ}で頭をあらい、もう一ぺん腰かけにもどり、顔に、ぬるぬるしたものをぬってもらうと、松吉の番はすみました。こんどは、弟の杉作がかわつて、腰かけにのぼりました。

時計を見ると三時四十分でした。さつきは、入口のガラス戸の下までさしていた日ざしが、いまは、上の方に忘れられたように、ほんのすこしのこつているだけです。

と、そのとき、入口の戸をガラガラと乱暴^{らんぼう}にあけて、茶色のジャケツをきた少年が手さげかばんを持つてはいつてきました。

「ただいまア。」

克巳^{かつみ}でした。

松吉と杉作は、一ぺんに生きかえりました。「克巳ちゃん。」

ということだが、松吉ののどのところまで出てきました。しかし、そこで、とまってしまいました。克巳のあまりに町まちふうなようすに対して、じぶんたちのいなくさが思い返されたのでした。

克巳は、最初に松吉と、それから杉作と顔をあわせました。しかし克巳の目は、知らない人を見るように冷れいたん淡でした。おれたちが、松吉、杉作なことが、まだ、わからないのかなと、松吉は思いました。齒がゆい感じでした。

克巳はながくは、そこにいませんでした。松吉のうしろの階かいだ段だんをのぼって、二階へ上がってしまいました。

でもまだ松吉は、望みをすてませんでした。克かつみ巳は、ちよつとした用事を二階ですまして、いまにおりてくるだろう。そしてお

れたちと遊んでくれるだろうと、松吉は考えていました。

だが、克巳はさっぱりおりてきませんでした。

やがて、克巳の友だちらしいのがふたり、

「克巳くウん。」

といつて、外から店にはいつてきました。

克巳は二階からおりてきました。

松吉は、胸^{むね}がわくわくしました。こんどこそ克巳が、松吉たちになにかいつてくれると思つたのです。

しかし克巳は、松吉には目もくれませんでした。そして、ふたりの町の友だちを手まねきして、三人いっしょに、どやどやと二階へあがつてしまいました。

松吉は、つき落とされたように感じました。じぶんの立っている大地が、白ちやけたさびしいものにかわってしまいました。

松吉にはわかりました。克巳にとっては、いなかで十日ばかりいっしよに遊んだ松吉や杉作は、なんでもありやしないんだと。町の克巳の生活には、いなかとちがつて、いろんなことがあるので、それがあたりまえのことなんだと。

四

松吉と杉作は、町から村のほうへ、たましい魂のぬけたような顔をして歩いていきました。

からの重箱じゅうぼこは、ズボンとポケットにつつこんだ松吉の右手に、だらしなくぶらさがり、ひと足ごとにおしりにぶつかります。いくときの、希望きぼうにみちた心持ちにひきかえ、帰りの、なんという、まのぬけた、はぐらかされたような心持ちでしょう。

考えてみると、きようは、あほくさいことでした。第一、克巳かつみに知らん顔をされました。第二に、だちんがもらえなかつたので、帰りも電車に乗れませんでした。第三に、やはりだちんがもらえなかつたので、雑誌ざっしや模型もけい飛行機ひこうきの材料ざいりょうを買う夢ゆめが、おじやんになつてしまいました。

こうしてじぶんたちは、すつぽかされて、青坊主ぼうずにされて帰るのだと思うと、松吉は、日ぐれの風がきゆうに、かりたての頭や

えり首に、しみこむように感じられました。

「どかアん。」

と、杉作がとつぜん、どなりました。

また、とびかと思つて、松吉は見まわしましたが、それらしいものは、どこにも見あたりません。かれたクワ畑のむこうに、まつかな太陽が、今しずんでいくところでした。

「なにが、おるでえ。」

と、松吉は杉作にききました。

「なにも、おやしんけど、ただ大砲たいほうをうつてみただけ。」

と、杉作はいいました。

松吉は、弟の気持ち、手にとるようによくわかりました。弟

も、じぶんのようにさびしいのです。

そこで松吉も、

「どかアん。」

と、一発、大砲をうちました。

すると松吉は、こんな気がしました——きょうのように、人にすつぽかさされるといふようなことは、これから先、いくらでもあ
るにちがいない。おれたちは、そんな悲しみになんべんあおうと、
平気な顔で通りこしていけばいいんだ。

「どかアん。」

と、また杉作がうちました。

「どかアん。」

と、松吉はそれに応じおうました。

ふたりは、どかんどかんと大砲をぶっぱなしながら、だんだん心を明るくして、家の方へ帰っていきました。

青空文庫情報

底本：「童話集 こんぎつね―最後の胡弓ひき ほか十四編」講
談社文庫、講談社

1972（昭和47）年2月15日第1刷発行

1988（昭和63）年1月30日第30刷発行

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年6月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

いぼ

新美南吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>